五味川純平著作集

第19巻

戦争と人間

(8)

五味川純平著作集

第19巻

戦争と人間(8)

三一書房

五味川純平著作集　第19巻（全20巻／第8回配本）
戦争と人間(8)
一九八四年二月二十九日　第一版第一刷発行

定　価　三五〇〇円
著　者　五味川純平©一九八四年
発行者　菊地喜三次
発行所　株式会社三一書房
〒101東京都千代田区神田駿河台二の九
☎03（291）3131
振替東京9－84160

印刷　北京印刷一廠（本文組版）
暁印刷株式会社（本文印刷）
東洋美術印刷株式会社（扉・函印刷）
製本　東京美術紙工　製函　高田紙器
装丁　熊谷博人

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

Printed in Japan

五味川純平著作集　第十九巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

戦争と人間

裁かれる魂　第三部

1

グアム島から宇品へ向って北々西に針路をとっているはずの船が、いつの間にか反転して引き返しているようであった。何処を見ても同じような茫漠とした蒼い海だが、太陽と船との関係位置が逆になっている。兵隊たちは訝った。せっかくミッドウェー上陸作戦が取り止めになって、内地帰還が叶えられたと思っていたのに、また逆戻りである。

デッキに溢れている兵隊たちは、間もなく、参謀総長指示に基づく行先変更を知った。直ちにグアム島に引き返し、乗船のまま待機、というのである。彼らが投入される作戦予定地はニューギニア東部かその近辺らしい。

このときの作戦予定地が変更になったにしてもならなかったにしても、兵隊たちの運命に大して変りはなかったであろう。彼らの多くが、南半球の何処かの島で戦死するか餓死するかするように運命づけられていたことに大きな差異はなかったのである。彼らには、しかし、悲惨な運命の予感はなかった。精兵中の精兵と言われ、自らもそう信じていた彼らの、戦意旺盛な突撃によって陥ちない敵陣があるとは思っていなかった。海軍のミッドウェー作戦は首尾よくゆかなかったらしいが、だからこそミッドウェー上陸作戦が中止になったにちがいないのだが、陸戦で一敗地にまみれることなど想像できなかった。

彼らは、誰も、まだ南半球へ赤道を越えたことはなかった。赤道というからには、青い海のただ中にそこだけ色の変った帯のような部分があるらしく思える、そんな幼稚な、しかし愉しい錯覚があった。

ただ蒼く、ただ黒々とした海の涯もないひろがり——彼らはまだ赤道に達してはいない。

斯波上等兵は舷側に湧き立つ夥だしいサイダーの気泡のような泡立ちを飽かずに見下ろしていた。彼は、日ならずして自分たちが投入される戦闘を怖れも厭いもしなかった。むしろ武勲を立てたいと希っていた。だから、戦地へ船が引き返すことを惜しみはしなかった。ただ、内地へ戻れば、ひょっとして従姉弟の斯波発子に会えるかもしれないと思っていたのが駄目になった、それが心残りといえば心残りであった。

最後に手紙をもらったのは開戦直前であった。大連から東京へ出て暫く滞在することになるから、北海道まで足を伸して面会に行けるかもしれないと書いてあった。返事を出したが、届いたかどうか。斯波は楽しみにしていたが、動員までに発子は来なかった。

斯波努にとって従姉弟の発子は齢上だが、最高に美しい女性であった。どんな女を見ても、発子と較べたら見劣りがすると思った。発子ほどはきはきものを云って、それがみんな適切に聞える女はいなかった。ツンと澄ましているような、些か冷い表情も、田舎育ちの斯波努にはいかにも都会風に見えて、魅力があった。しかも冷いだけではないのである。曲線美に富んだ姿のいい肢体には熱い血がふんだんにたぎっていそうである。ときどきびっくりさせられるくらい大胆で情熱的である。だが、そうはいっても、斯波上等兵が発子とゆっくり時間を過したことは、入営以前にたった一日半しかなかった。彼にはその一日半ほど愉しくて充実していた時間はいままでになかったし、これからもおそらくないであろう。何故なら、これから彼は戦地へ行くのである。勇猛果敢に戦って、戦死するのである。彼はそのことを悔んではいなかった。彼が斯波発子に値するには、勇敢な戦士として国のために戦うという方法以外にはないと考えていた。誰よりも勇敢に国のために私を滅して戦って死ぬ。その崇高な行為だけが、彼がひそかに愛している女から敬意と愛情を受けるにふさわしいのである。

彼が激戦地で闘うときには、斯波発子に見られているつもりで壮烈な戦い方をするであろう。

彼は、舷側に砕ける波の音のなかで、斯波発子の声を甦らせていた。そのとき彼はこうきいたのだ。

「姉さん、どうして結婚しないの」

「どうしてってこともないわ。結婚したい人がいなかっただけ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「好きな人いなかったの」
「いたわ。……とても好きだった。でも、それっきり」
「どうして」
「あたしのなかに別の人を映しているようだったから」
「その人、いま後悔してるだろうな」
「さあ、どうかしら」
「姉さんに好かれて、それに応えないなんて、その人どうかしてるよ」
「子供だったのよ、二人とも。若い時間が幾らでもあると思っていたのよ、きっと」
斯波は思った、若い時間はそう沢山はないのだ、と。
戦友が寄って来て、
「おい、何考え込んでる」
と、横顔を覗いた。
「スーちゃんか」
「そうだ」
「女か……」
その兵隊が唸るような溜息をついた。
「女はいいよな。男の夢の兵站部だ。惚れた女となら、どんな作戦だって文句はねえ」
その男は深刻な顔をして、自分の云ったことに自分でうなずいて、また云った。
「美人か」
「ああ」
「痩せか、デブか」

「ちょうどいいぐらいだ」
「たまらねえな」
男は半身を舷側に乗り出すようにして、斯波上等兵の顔を下から覗いた。
「もうやったか」
下品な質問に似合わぬ真剣な顔つきであった。
斯波はどぎまぎした。彼はまだ発子の手さえ握ったことはない。
「まだだ。そんなとこまで行ってない」
「馬鹿たれ！」
戦友は笑った。
「よくまあ我慢したもんだよな。帰還するまで残しておきましょうってわけか」
「そんなんじゃないんだ」
「帰ってみい。満員でございまァす。お乗りにならないでください、と来らあ」
「張り飛ばすぞ、この野郎」
「怒るこたァねえよ。怒るんなら、てめえの馬鹿さかげんを怒るんだな。俺たちァミッドウェー作戦は中止になった。だが、今度はそうはいかねえ。勝ち戦でも弾丸は誰にあたるかわからねえ。そうだろ。やりたいことは、とっておかずにやっておくもんだ」
斯波は、相手の男、竹下上等兵の云うことはもっともだと思った。斯波発子は、しかし、彼にとってはそんな女ではなかった。彼女は一人の男の青春が独自に昇華した透明な、輝きに満ちた、美の結晶であった。彼は、その女が何を考えていようとかまわなかった。彼はいま、その女に値するために、万里の波濤を越えて戦地へ向っているのである。

2

ミッドウェー海戦から二ヵ月。昭和十七年（一九四二年）八月七日、日出前、ソロモン諸島のガダルカナルとその対岸の小島ツラギに輸送船多数を伴った米艦隊が襲来して、上陸を開始した。

日出は五時前であったが、六時過ぎにはツラギ通信基地からの通信が絶え、ガダルカナルはそれ以前から沈黙していた。

ツラギとその隣の小島ガブツは、五月三日以降海軍陸戦隊が占領しており、ガダルカナルには七月初旬から第十三設営隊一三五〇名と第十一設営隊約一二〇〇名が飛行場の設営工事[註一]をしており、八月五日にその第一期工事が完成したばかりであった。

設営隊は工事中から米軍飛行機の爆撃を受ける状況にあったので、工事完成と同時に戦闘機隊の進出を要望していたが、戦闘機隊を即時推進する用意が日本側にはなかった。

日本側では、七月下旬からガダルカナルとツラギに対する爆撃が頻繁になってはいたが、それは米豪連合軍が日本軍のポートモレスビー（ニューギニア南岸）攻略を阻止するために日本軍の前進基地に対する制圧攻撃を行なっているに過ぎない、と判断していたのである。米軍の本格的反攻がそんなに早く行なわれるとは予期していなかった。

ガダルカナルへの航空基地推進を計画したのは海軍だが、大本営陸軍部の首脳や幕僚の大部分はガダルカナルという地名すら知らず、そこに海軍設営隊によって飛行場が設営されていることを知らなかった。海軍からの通報がなかったのではなくて、それだけ関心が薄くて記憶に留められなかったのである。

日本軍指導部のこの散漫さでは、米国では六月二十六日に既に第一海兵師団と空母二隻を基幹とする兵力を投入し

て八月初旬にツラギとガダルカナルを攻撃して、日本軍の豪州や米豪連絡線に対する進攻企図を破摧しようとする米海軍の作戦案が決裁されていたことなど、到底推測し得るはずもなかったのである。

米軍がガダルカナルに上陸した七日当日に日本陸海軍幕僚の連絡会議が出した結論は、①推測される敵海軍の戦備から判断して、また現有空母勢力から推して、ガダルカナルとツラギに対する来攻は偵察上陸の程度であろう、②仮りにそれが占領を企図する反攻であるとしても、我が陸海軍部隊がこれを奪回することは容易であるが、ガダルカナルの飛行場が敵中に陥ちると爾後の作戦に不都合を来すから、奪回作戦は即時行なわなければならない、というのであった。この七日午前大本営海軍部が行なった敵情判定は、ツラギに艦戦一、空母一、巡洋艦三、駆逐艦一五、輸送船若干、ガダルカナルに巡洋艦三、駆逐艦七、輸送船二七隻が飛行場東方の泊地に進入している、と、大体正確だったのである。輸送船二七隻もの進入を、何故偵察上陸の程度と判定するのかが問題である。仮りに、輸送船の平均噸数を三〇〇〇乃至五〇〇〇とし、輸送兵員一人当所要船腹を日本流に三噸とすれば、二七〇〇〇乃至四五〇〇〇の兵力を揚陸し得る計算になる。「米軍は贅沢だから」として一人当所要船腹を日本流の二倍としても、明らかに戦略単位の兵力を上陸させ得る計算が立つ。それを偵察上陸の程度というのは、ミッドウェー敗戦二ヵ月後であるのに、真剣な考慮が払われていたとは見えないのである。

七月上旬、杉山参謀総長が、東部ニューギニアとラバウルの線は確保しなければならない、その線が破れたら太平洋正面が危険となるだけではなくて、米軍の反攻がニューギニア伝いに西進して我が南方要域が崩壊する怖れがある、と指摘していることからみても、連合軍の反攻がこの方面からはじまることを予期してはいたのである。それにもかかわらず、予想される反攻を撃破するための作戦、特に、たとえばソロモン群島の防禦作戦に関して大本営陸海軍部の間に真剣な研究討議は行なわれていなかった。これが緒戦の成功の直後ならいざ知らず、時期的にはミッドウェー海戦での決定的な敗北以後のことであるから、その怠慢、緊張の弛緩、敵を下算する軽薄さは、まさに救い難いというべきである。

八月七日の米軍上陸以後、約半年にわたって日本はガダルカナル奪回のために空・海・陸に死闘を演じ、さなきだに乏しい戦力を消耗してしまうことになる。

ガダルカナルとその対岸のツラギに日本海軍が基地を設営したのは、アメリカとオーストラリアとの連繋を遮断するために、一つにはニューギニア南東岸のポートモレスビー攻略作戦に航空基地が必要であり、二つにはフィジー、サモア、ニューカレドニア方面に力を及ぼすための前進基地としての必要からであった。だが、その選定がそもそも慎重を欠いていたのである。

ガダルカナルは赤道の南五五〇浬、日本海軍の前進根拠地としては最南端にあったラバウルからもさらに南々東へ約五六〇浬隔っている。ラバウルからのこの距離が、空・海・陸にわたる死闘にとっての致命的な欠陥となったのである。

当時の航空機の性能からすれば、陸上航空基地の推進は三〇〇浬が標準の上限といってよかった。それを、いきなり五六〇浬も伸長したのである。五六〇浬では、航続力の大きいことで有名な零戦でも、敵地上空での滞空時間は十五分しかなく、それを越えれば帰投はできないことになる。艦爆に至っては攻撃半径は二五〇浬しかなかった。したがって、零戦も艦爆も出撃のためには中継基地が必要であったが、ガダルカナルに航空基地を設営しながら中継の配慮はなされてなかった。

単純な算術の問題であるにもかかわらず、その配慮を怠ったのは、米軍の反攻がそんなに早く行なわれるとは予想しなかったからであろう。つまりは敵を甘く見ていたのである。敵の戦略戦備の展開速度を自分に都合のよいように独善的に判断していたことになる。珊瑚海海戦やミッドウェー海戦で米軍が発揮した旺盛な戦意や巧妙な戦術が、まだ、深い反省をもたらすには至っていなかった。

八月七日の米軍最初の反攻上陸のときには、在ラバウル海軍航空部隊は全力を挙げて攻撃を加えたが、距離の遠大、米軍の電探による邀撃に阻まれ、加えて、雲のための視界不良もあって、攻撃隊は帰途には洋上着水という非常措置

までとったにもかかわらず、ガダルカナルとツラギに在泊して攻略部隊を揚陸している敵の輸送船団に対してなんら打撃を加えることができなかった。

この日以後、日本軍の揚陸と補給は、ほとんどその都度米軍航空機によってしたたかに損害を蒙り、反対に米軍の増強に対する日本航空部隊の攻撃は思うに任せない事態が反復するのである。

その理由は、基地推進の無謀と並んで、基地設営能力と補給能力が彼我の間で比較を絶していたこと、その認識が全く不足していたことである。空を飛んで戦うことだけが航空戦ではなかった。日本は格闘だけを重視して、基地の設営や補給を甚だしく等閑視していた。その報いであった。次に、操縦者の育成に関しても、彼我は全く隔絶していた。日本のとってきた少数精鋭主義は消耗の確率に耐えなかった。ミッドウェーで熟練操縦者を半数近く失い、その後補充した平均練度の低い搭乗者も半歳にわたるガダルカナル航空戦で逐次失われた。米軍は、そのころ、母艦群の建造を急ぐとともに、十万二十万と搭乗員を練成していたのである。

太平洋上では航空戦がすべてを決定したといってよい。制空権のないところに艦船の行動の安全はない。艦船行動の自由がなければ、地上兵力の輸送も補給も至難の業である。ために、ソロモン海域は鉄底海峡と呼ばれ、ガ島（ガダルカナル）は餓島と呼ばれる相貌を呈することになった。

外南洋を担当していた第八艦隊は、八月七日早朝ツラギからの飛電に接しても、米軍上陸を本格的反攻のはじまりとは判断せず、一個大隊程度の地上兵力をさし向ければ奪回できると考え、艦隊出撃の準備を急ぐとともに、第十七軍（陸軍・在ラバウル）に陸軍兵力の派遣を要請した。十七軍には作戦日程にのぼっているポートモレスビー攻略に充当予定の南海支隊以外の兵力はなかったので、ガダルカナルへの転用には応じなかった。

十七軍は――十七軍に限らないが――ガダルカナルが全戦局を左右する焦点になろうなどとは想像していなかった。当初は、ガダルカナルをもツラギという名称のうちに含めて呼ぶ程度の認識しかなかったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com